

なら医療DX通信

2025
SEP
Vol.5

看護と医療DXは？

1. はじめに

超高齢化社会の到来、それに伴う医療ニーズの増大、そして深刻化する医療従事者の人材不足。日本の医療、特に日々患者さんと向き合う看護の現場は、今大きな岐路に立たされています。増え続ける業務量と責任の重圧の中で、いかにしてケアの質を維持・向上させていくかということを真剣に考えていかなければなりません。看護は常に生活するすべての人々のニーズに合わせて進化しなければいけません。そんな、医療DXにチャレンジする看護に関わる事例をご紹介します。最新の動向や課題を解説できればと思います。

2. インパクト絶大！？看護現場のAI活用事例

・生成AIによる文書作成

看護師にとって大きな負担であった退院時サマリー(要約書)や申し送り文書の作成。電子カルテに記録された膨大な情報から、生成AIが必要な情報を抽出・要約し、文書の草案を自動で作成するシステムが実用化されています。ある病院では、このシステムの導入により、サマリー作成時間が平均で42.5%も削減されたという報告もあります。

・AI音声入力による記録業務の削減

以前「なら医療DX通信Vol.1」でも触れた音声入力技術。ベッドサイドで患者のケアをしながら声に出すだけで、スマートフォンの専用アプリ・AIが内容を認識し、リアルタイムでテキスト化。そのまま電子カルテに反映されるため、ナースステーションに戻ってからまとめて記録を入力する必要がなくなり、記録業務にかかる時間が削減できる事例も出ています。これにより、看護師はより多くの時間を患者との対話に使えるようになっています。

3. 費用面の課題

素晴らしい事例の数々を見ても、「うちの病院では予算的に難しい」と感じる方は多いでしょう。実際に、DX推進には費用という大きな壁が立ちます。ご紹介した資料でも、例えばインカム導入にはWi-Fi構築費を含めて数百万円、モバイル端末の導入には機器とシステム費用で1,000万円を超えるケースも示されています。

4. 費用の壁を乗り越えるには

・「コスト」ではなく「投資」と捉える

導入費用だけでなく、費用対効果(ROI)で考えることが重要です。例えば、月12時間の残業が削減されれば、人件費の直接的な削減に繋がります。また、看護師の負担軽減による離職率の低下は、数百万とも言われる採用・教育コストの削減に貢献します。DXは未来の経営を支える「投資」なのです。

・公的な支援制度を最大限活用する

国や自治体は、医療DXを推進するための様々な補助金・助成金制度を用意しています。2024年度の診療報酬改定で新設された「医療DX推進体制整備加算」も、まさにその一つです。

こうした制度をリサーチし、活用することで、初期投資の負担を大幅に軽減できます。

・スモールスタートで始める

いきなり全病院で大々的に導入する必要はありません。「まずは1病棟で試してみる」「クラウド型の月額サービスを利用して初期費用を抑える」など、自院の体力に合った「無理のない方法」で始めることが成功の鍵です。

小さな成功体験を積み重ね、効果を院内に示すことが、次の大きな投資へと繋がります。

5. まとめ

AI技術が進んで、「採血が一発できちゃう夢のアシスタントロボットができたらな～」、「血管が透けて見えちゃうAIゴーグルなんていいかも？」なんて色々な思いがあります。一見、楽しただけかな？と思われるかもしれませんが、そうではありません。より負担の少ない医療を受けてもらうためには？持続可能な看護とはなにか？など、これからの看護師はテクノロジーをパートナーとすることで、煩雑なタスクが軽減し、専門的な判断や温かいコミュニケーションといった「人間にしかできないケア」に、より多くの情熱と時間を注げるようになります。「ありたい姿」の実現に向けて、このコラムが次の一步を考えるきっかけとなれば幸いです。

*内容について、さらに深く知りたい方は、
奈良県立医科大学 戦略的医療情報連携推進講座 までお問い合わせください。

Mail : spmic2024nmu@naramed-u.ac.jp



Dr.タマモンの 今月のひとこと

9月といえばお月見。肝心の満月が雲に隠れて見えない…なんてこともありますよね。現場では、なかなか進まない医療DXですが、そんなモヤモヤをすっきり晴らすのが「クラウド型電子カルテ」。医療現場でもクラウドをフル活用すれば、スタッフみんなで月夜の空を見上げる余裕も生まれ、職場の雰囲気も今より良くなるかもしれません。

